HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文献紹介：「諸国民の反ファッショ抵抗闘争における教師」
Author(s)	上杉, 重二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 27, 141-146
Issue Date	1976-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29140
Type	bulletin (article)
File Information	27_P141-146.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文献紹介:「諸国民の反ファッショ抵抗闘争における教師」

上　杉　重二郎

Rezension: "Lehrer im antifaschistischen Widerstandskampf der Völker"

Jujiro Uesugi

ドイツ民主共和国の教育史家の最近の成果の一つ，"Monumenta Paedagogica" の第15巻として刊行された本書の概略をここに紹介して，その意義を示すこととする。

本書，すなわち "Lehrer im antifaschistischen Widerstandskampf der Völker. Studien und Materialien. 1. Folge, Reihe B: Bildungspolitische und pädagogische Bestrebungen der Arbeiterbewegung bis 1945." Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin 1974, 400S. なる大著は，ドイツ民主共和国教育科学アカデミーの「ドイツ教育史および学校史委員会」によって刊行された。ドイツの科学アカデミーは，この教育科学アカデミーを含めて，日本学士院などとは違って，現実に機能している機関であり，また日本の学会とも異なって，独自の研究所を持つのみならず，ドクトルの称号を与える権能を持っている。したがってこうした大きな力を持っている教育科学アカデミーが本書を刊行したということ自体は，別にとり立てていうほどのこともないように見える。

しかし本書の刊行はじつはさまざまの意味で，大きな意義を持つと言わざるをえない。それは第一には "Monumenta Paedagogica" はすでに15巻を数えているが，上記の「ドイツ教育史および学校史委員会」は当初は，ドイツ(諸)科学アカデミーに属しており，この "Monumenta Paedagogica" もドイツ科学アカデミー（ベルリン）の業績として発表されていた。それが10年ほど前日本教育学会の招きで来日したこともあるギユンター博士 Prof. Dr. Karl-Heinz Günther やアルト博士 Prof. Dr. Robert Altらの努力によって，ようやく教育科学アカデミーとして独立することとなり，こうした独自の研究成果を発表するに至って，まだ5年とは経っていない。すなわち本書の刊行は，教育科学アカデミー成立の意義を浮彫りにしているのである。

第二に言及すべきことは，上記の委員会はすでに早くドイツ科学アカデミーの下にあって，着実にその成果を蓄積してきたということである。しかもこの委員会で指導的な役割を果しているドレスデン教育大学教授ホーエンドルフ博士 Prof. Dr. Gerd Hohendorf * らがじつに今から10年以上の前に計画に着手し，ようやく1965年11月に4日間にわたってポツダム教育大学** において，「ドイツ労働運動の教育政策的および教育学的伝統」研究集団の大会を催すに至ったが，この大会のテーマが，

---

* ホーエンドルフ教授はクララ・ツェトキンの研究者としても知られ，その著者には "Revolutionäre Schulpolitik und marxistische Pädagogik im Lebenswerk Clara Zetkins." Berlin 1962, 196S. などがある。

ほかならぬ「諸国民の反ファッショ抵抗闘争における教師」であった。つまり本書の刊行にいたるまで10年を越える年月を要しているので，その息の長さには驚くほかはない。私自身，委員会がこのテーマを選んだことがすでに，ドイツ教育史家の研究の正しい方向と高い水準を示すものであるとして，1965年に同委員会に敬意を表した。その後 Prof. Hohendorf の求めに応じて，本書に掲載された〝Die Widerstandsbewegung der japanischen Lehrer in den dreissiger Jahren〟(1930年代における日本の教師の抵抗運動）を送ったけれども，いつかな刊行の様子がないので，企画が中止になったのだろうかとも思っていたところ，思いもかけず本年（1975年)夏本書が送付されてきた。この10年の歳月のうちに31人の執筆者のなかですでに５人が逝去している。

ゆっくりしたテンポながら，ねばり強い骨折りによって，我々はようやく今日本書を手にすることができたのだが，本書にはこの10年間の研究成果が充分には盛り込まれていないように思われる。というのは，たしかに各執筆者はこの間可能な限り加筆しているとはいえ，スケルトンを変えるわけには行かず，部分的な修正にとどまっているし，それに委員会がたんにドイツ人教師の抵抗のみを対象とせず，広く諸国民の抵抗運動を取り上げようとしたために，外国の執筆者にとっては旧稿を編集者に委ねて，空しく刊行の日を待つこととならざるを得なかったから，必ずしもそれらには現在の研究水準が反映していないのである。

またこの間ドイツ民主共和国においては教育史家の関心が，一方においては1945年以降の学校制度の変革，発展に，他方においては11月革命および革命的戦後危機期における労働運動の教育学的伝統に向けられ，したがって政治史，なかんずく労働運動史の領域において反ファッショ抵抗運動の研究が著しい発展を示したのに対し，教育史の領域においてはこれに応ずる成果を示すことが，充分に出来なかった。現に本書に４篇を寄せているドロビシュ博士 Dr. Klaus Drobisch はむしろ政治史の分野で知られ，まだ若い人ながらキリスト教徒の反ナチ運動の研究者としては１人者と言える人であって，かような点にも教育科学アカデミーの若さが現れているように見受けられる。

しかしながらもとより教師の抵抗運動と全労働運動とは，切り離されてあるものではない。むしろ本書の特色は，その標題の示すように「反ファッショ抵抗運動のなかの教師」という把え方をしているところにあり，ドロビシュ博士などがここで活躍するのは当然の帰結なのである。またここでとりあげられているテオドル・ノイバウエル，エルンスト・シュネラーなどは優れた教師ないし教育政策研究者ではあったが，それ以上に反ヒトラー抵抗グループの組織者として大きな仕事をした革命家でもあり，したがって教師の運動は労働運動のなかに位置づけられて始めて，正当な理解を受け得ると言える。また教師の抵抗運動を組織し，正しく方向づけたのがドイツ共産党を中心とする勢力であったことも，教師の反ファッショ運動とファシスト支配下の全ドイツ労働運動との結びつきを，必然のものとしている。

ちなみに国際共産主義運動においては1935年のコミンテルン第７回大会が統一戦線政策を強く打出し，ドイツにおいてもブリュッセル党会議（1935年），ベルン党会議（1939年）は，ドイツ社会民主党，ドイツ労働組合総同盟また中間層ないし非独占ブルジョアジーの民主的諸組織および個人との

** ドイツがソ連および連合諸国の手によって，ヒトラー・ファシズムから解放された後，とくにソ連占領地区（現在のドイツ民主共和国の地域）においては，ナチズムに毒された教育政策および教師集団を，180度転換させて民主主義の方向に向かわせることが，重要な課題の１つとなった。民主的教師の育成にとくに大きな役割を果したのが，この大学であった。

統一行動を，前にも増して具体化していったが，連合勢力の1つの柱たるべきドイツ社会民主党議長団は，その亡命後の本拠としたプラハがヒトラー軍によって占領された後は，ほとんど解体状態となり，したがって教師の抵抗運動に対する影響力も，ドイツ共産党に比しておのずときわめて小さいものとなった。

このようにドイツないしドイツ占領地における抵抗運動の歴史的研究は，大きな発展を遂げ，多くの著書も刊行されたけれども，そこにはなお少なからぬ困難が，とくに資料の面で依然として存在している。この困難が比較的若い，教師の抵抗闘争の歴史研究においては，いっそう強く現れていることは，ドイツ教育史および学校史委員会が本書の序文のなかで次のように述べているとおりである。

「大部分の活動は秘密の，非合法活動という特性を持たざるをえなかったことから，おのずと生じたことは，安全を守るという理由によって，このテーマにかんする多くのことがひとに知られることが許されなかったし，文書に書き残すことも，ましてやそれらを保存しておくことはできなかった，という結果となった。また多くの闘士たちはファシストの獄卒の手によって殺され，殺されなかった者ももはや生きてはいない。記憶はいっそうおぼろげになり，はっきりしなくなった。敵の文書で残存しており，史料として役立ち得るものもあるけれども，歴史的真実を確かめるためには，厳密な批判を要するのである。」（S．8）

したがってProf. Dr. Hohendorfそのほかの委員はここで，極めて謙遜に「この一巻はただ最初の資料蒐集の試みであり得るにすぎず，またそうあるべきものであろう」（Ibid.）と述べ，そして本書の刊行がドイツとそのほかの国々における教師の抵抗闘争にかかわる史料発掘を促し，その機縁ともなることを切望している。そしてこれは漠然とした願望にとどまらず，全く具体的に「我々は北ヨーロッパ諸国，イギリス，オランダ，ベルギー，オーストリア，イタリアおよびイスパニアの教育学者に対して，委員会（DDR－108 Berlin, Leipziger Str. 3／4)に宛てて可能なかぎり速かに，すでに完結した研究成果を報告し，また回想，資料，文書を公刊するために我々に委ねるようお願いする」（S.9）と記している。日本についてとくに言及していないのは，委員会の任務がなかんずくヒトラー・ドイツに対する抵抗闘争を対象とした研究におかれているからであろうが，委員会は言うまでもなくプロレタリア国際主義の立場に立ち，したがって我が国の教師の抵抗運動にも同じ深い関心を示している。そのことは本書が前に触れたように，日本からの一論文を掲載していることによっても明らかである。日本の研究組織がこの委員会と積極的にコンタクトを持つことが望まれる。

さて寄稿者の内訳は，ドイツ民主共和国11人を筆頭として，ソ連5，チェコスロヴァキア4，ルーマニア，ユーゴスラヴィア，ポーランドが各々2，ハンガリー1および資本主義国からは日本1，西ドイツ1となっている。委員会のさきの呼びかけが主として西側諸国に向けられているのは，上に見るアンバランスからも当然であろう。またフランスについて言えば，すでに1965年の大会の際の呼びかけに対して，国際教員運動の著名な指導者の1人ポール・ドゥラヌ氏のイニシアティヴで計画がたてられ，ファシズムに反対する教師の活動の記録が送られてきているということであり，ドイツの委員会はその刊行をすでに期待している。

「我々は次の巻で，この記録の世界史的な性格がいっそう明白になるであろうことを，希望している」（S．9）との委員会の言葉は，また同時にわれわれの希望をも反映している。

さらに委員会が序文の最後に記した言葉は，現在われわれが，さまざまに変形し，時には反ファシスト運動をファッショと規定して国民の意識に混乱をもたらそうとするファシズムの前駆症状を目前にしていることを思えば，日本の教師に対する警告ともなり得る。

「これらの巻〔続巻をも含めて〕は，後世にとっての回想および警告のモニュメントであるべきものである。今日ファシズムの根とその罪業とが，全世界いたる所において根こそぎにされていないのであるから，これらの巻はなおいっそう必要なものとなっている。それゆえに帝国主義的教育学および学校のなかに，公然としたものであれ，あるいは隠微なものであれ，現れつつあるファッショ的傾向に対する闘争を，今後もさらに遂行しなければならない。」（S.9）

ところで本書の執筆者は，大学あるいは科学アカデミーなどの研究者が多いが，しかし他面事の性質上教育省の勤務者，在郷軍人会員，国際的な組織である「ナチ体制による被迫害者連盟」のメンバー，教育新聞のジャーナリスト，「自由ドイツ」国民委員会***の会員，共産党中央委員会附属研究所員などが見受けられ，それが本書の一つの特色をなしている。このこととかかわって，委員会が序文において断っているとおり，当然さまざまの種類の論文が並存しているし，回想記も加わっている。

ドイツ以外の国々からの論文は，それぞれ小さな数だが，L.J.ラスキン「それはレニングラードのことだった」，M.M.クラコフ「スモレンスク地区の国民教育の分野におけるファシスト占領者の政策」やニコライ・キュング「ブッヘンワルト強制収容所における学校 ── プロレタリア国際主義の証拠」のように限られた場面の運動を取り上げたものもあるにしても，概してそれぞれの国の教師の抵抗史のある包括的なアスペクトを与えている。たとえばオト・ヴァグ「1919年から1944年に至る反革命時代におけるファシスト教育に反対するハンガリー教育者のたたかい。」もちろんいずれも20ページ前後の小論文であるから，スケッチの域を出ない。けれどもこれらの国々の教師の運動にかんする知識は，日本においてはほとんど無に等しいのであるから，その意味でこれらは我々に対する大きな寄与となっている。

これに対してドイツ人の論文は，ドロビシュの最初の論文を除けば，個々の教師，特定の地域あるいは組織内の教師の運動を取り上げている。しかしここでは個々の論文を一つ一つ紹介することはできない。そこでまず印象程度のことを伝えることになるが，これらの論文に現れてくる教師たちはたしかに教師であったには違いないが，彼らの民主主義的思想のゆえにほとんどすぐさま学校を逐われてしまった。**** ファシストは教育機関 ── 大学から国民学校にいたるまで ── のナチ化に全力を

*** これは1943年7月にドイツ共産党のイニシアティヴによって生れた抵抗組織である。捕虜となった将校なども含む広調な反ヒトラー国民戦線組織として発展した。

**** ドイツ民主共和国の歴史家たちが，「反ファッショ抵抗運動」というものをどのように考えているか，は我々にとって興味なしとはしない。それは例えば近来「国内における亡命」などということも言われていて，積極的にナチに協力しなかったこと，あるいは消極的に「ヒトラーはいやだ」と思っていたことも，一つの抵抗の形態だと考える人もいるからである。これに対して歴史家たちが抵抗として評価するのは，ヒトラーの支配体制を倒すという積極的な行動である。このことは我々にとっても少なからず意味のある提言であって，しばしば「暗い谷間の良心のともしび」というような表現で，これを抵抗の一形態と考えるインテリゲンチャが見受けられる。他面これを自己弁護の一種にほかならない，と理解する人もいる，というように複雑かつ深刻な問題にかかわっている。

ところで反ファッショ抵抗運動に加わった教師たちが，たちまち逮捕，拘禁という目にあったことについて，あるいはいわば戦術の拙さがあったのではないか，と判断する日本人はわりに多いのではなかろうか。「ヒトラーはいやだ」あるいは「ぼくらはごめんだ」（"Ohne uns"，「我々なしで」）という程度の，内心的「抵抗」にとどめておけば，ゲシュタポに捕えられなくとも済んだのではないか，と考えることもできるかもしれない。

ないしはすぐに「転向」（"Bekehrung"というドイツ語がこれにぴったりかどうかは，多少疑問があるが）また神山茂夫などが大いに弁護した「偽装転向」をしておけば，彼らドイツ人教師たちは再び学校に戻って，

挙げ，たとえばベルリン大学正面のオペラ劇場広場における焚書はそれを象徴している。したがってヒトラー権力の下では民主的教師たちは身をおく場所もなく，しばしば牢獄や強制収容所へ直行することとなった。だから当然のことながら彼らが教職にとどまって，学生，生徒や父母と結びつき，抵抗闘争を続けたり，あるいは今日行われているような地位保全の法廷闘争を行うなどということは，想像に絶する困難なことというよりまず不可能なことであった。しかしこのことは，追放された大学教授や諸学校の教師が学問や教育から全く離れてしまったことを意味しない。

学生について言えば，ドイツにおいては，日本におけると同様に少なからず特権的で，たとえば軍隊に入れば，労働者が一兵卒であるのに対して，将校の地位が保証されるということなどもあって，反動勢力と容易に結びついた。1960年ベルリン＝フムボルト大学創立150年祝典の一つの行事として，「ファシスト支配下の学生運動」というシンポジウムが催され，私もそれに参加した。しかしこのシンポジウムは意外と盛り上がらなかった。諸報告がその当時のまだ充分に高くない研究水準を反映していたと思うが，学生の抵抗闘争の実態ももとよりすべて非合法で，スケールが小さく，たとえば誠実かつ民主的な教授が追放されても，これにただちに呼応するという態勢にはなかった。本書の諸論文は，第3帝国下の学園の現実をよく示している。

さて最後にドロビシュ博士の論文："Deutsche Lehrer in der antifaschischen Front." S. 252－260（反ファッショ戦線におけるドイツ人教師たち）を紹介して，ドイツにおける教師の抵抗運動の諸特色を要約しておく。彼はまず抵抗運動一般におけるドイツ共産党の貢献を高く評価し，さらには1939年始めモスクワ郊外で開かれたベルン党協議会の綱領が，すべての教育者に対し「子どもたちを進歩，自由，正義およびヒューマニズムという理想の精神で満たす」（S. 254）よう訴えていることを挙げ，教師の反ヒトラー闘争においても，ドイツ共産党が適切な方針を与えていた，と示唆している。この年の秋には第2次世界戦争がとき放されたのであるから，このアピールはきわめて時宜を得たものであった。

戦争は1941年6月にはヒトラー軍のソ連に対するだまし打ちによって急速に拡大し，ファシストによる全ヨーロッパ支配の日が刻々迫るかに見えたが，彼らは1943年2月スターリングラードにおいて惨敗を喫し，第2次世界戦争は大きく方向転換し，なお困難の続くなかにも明るい展望が諸国民に見えてきた。1943年7月ドイツ人労働者，農民，インテリゲンチャおよび捕虜将兵らによって「自由ドイツ」国民委員会が結成され，この組織はその後の解放運動および戦後の民主的改革にきわめて大きな働きをとげた。この委員会のなかで教師たちは，将来の教育改革構想を練り上げていたが，こう

ある種の仕事を続けることができたのではないか，という想像も成り立ち得る。ぼくはドイツ人のインテリゲンチャにこれらのことを質ねてみたことがある。その答はドイツ人だってあの抑圧，拷問，殺害の事実また恐怖に屈してbekehrenした者はいくらでもあった，ということである。しかし「偽装転向」はないらしい。

この日本人とドイツ人との相違はどこからきているか，この解明は簡単ではない。しかし次のような推定はあり得よう。たしかにドイツ人の大部分がカトリック教徒または福音教会の信徒であるにしても，彼らは日曜ごとに教会を訪れるという習慣を急速に失っている。けれども日本人が仏教徒である以上に，彼らがキリスト教徒であることは疑いない。日本人くらい無宗教の民族はないとよく言われるが，ドイツ人の多くは神を信じていないにしても，なんとなく神を意識しているのではなかろうか。だからBehehrung, conversion（「回心」）を「戦術的に」簡単に取り消せないのではないか。もっとも抵抗闘争の中心になったのは，マルクス主義者であり，彼らは理論的にも実践の上でもAtheist（神の存在を否定，ないし拒否する者）であるから，上のような推定は必ずしもぴったりではないが。

した仕事は日々拷問と虐殺とが行われ，明日の命も分からぬブッヘンワルト強制収容所のようなところにおいてさえ進められており，労働者や農民とともにたたかった教師たちが，いかに強い確信をもって明るい未来を見とおしていたかには，ただ驚きを覚えるのみである。

前にも触れたように，ナチの統計ではあるけれども，ヒトラーの権力受領の前においてすでにおよそ1万3千人の教師が彼のドイツ国民社会主義労働者党に所属していたが，1933年1月30日の数ケ月後にはこれに加えて7万1千人の教師がさらに党員となった。翌年にかけてはほぼ教師の3分の1がナチ党に属した。これに対し一部の教師は中立的な立場をとり得ると考えていたが，実際はファッショ的思想の影響下に立たざるを得ず，ファシストの教育政策に従って教育を行なったのであった。「自由ドイツ」国民委員会に属した教師の数はむろん大きくはなかったし，教育機関に留り得たごく少数の良心的教師の努力にもかかわらず，青少年の大きな部分が，他民族に対する蔑視，排外主義，軍国主義，戦争讃美，独裁者に対する無条件服従，反共主義などの思想によって強く毒されるに至ったことは，避け難い結末であった。そしてこれとたたかうことが，責任を自覚した教師の大きな課題となった。しかし比較的には少数であっても，クルト・シュテッフエルバウアー Kurt Stefflbauer やワルター・ヴオルフ Walter Wolf のように，反ファッショ教師グループを組織し，指導する教師も生れた。教師の運動も多様であって，クルト・レルヒ K. Lerch のようにイスパニアで，あるいはユリウス・ハルペルン博士 Dr. Julius Halpern またヴィルヘルム・ヘルツオク Wilhelm Herzog のごとくフランスのマキ団に属して，ファシズムと武装闘争を遂行した者もある。

またファシスト，ゲシュタポに追求されている人々に対して，ヒュマニスティックな思想からなんらかの授助の手を差し延べた教師も少なくない。反ファシストに隠れ家や食糧，資金その他の便宜を与えることは，第3帝国ではほとんど彼らと同様の迫害を受けたのであるから，これらの教師たちの行動を過小に評価することはできない。彼らも広汎な反ファッショ人民戦線に加わっていた，と言うべきである。民主的教師の最後の犠牲者は，マリアンネ・グルンタル Marianne Grunthal であった。彼女はヒトラーの死と戦争の終結は確かだという願望を述べたために，1945年5月1日，すなわちファシスト体制崩壊のわずか1週間前にシュヴエリンにおいて紋首刑に処せられた。

この論文の筆者ドロビシュ博士もペンをおくに当って指摘していることは，教師の反ファッショ運動にかんする資料がまだまだ埋れており，この発掘に努力しなければならないということである。

彼はまた最後のパラグラフで，現在ドイツ民主共和国においては立派な業績をあげた教師に対して，毎年テオドル・ノイバウエル博士功労章が授与され，そして諸学校やピオニール組織に，抵抗運動のなかで倒れた教師の名が冠せられている，と記している。そのことはドイツの優れた教育伝統がこの国で生かされている一つの象徴のように思われる。

なおドロビシュ博士の論文には，注として関連文献が挙げられている。

我々にはよく知られていない「自由ドイツ」国民委員会における教師の活動については，つぎの2つの論文が掲載されている：

Wolf, Willy ：Zur Rolle von Lehrern in der antifaschistischen Bewegung unter den deutschen Kriegsgefangenen in der UdSSR vor der Gründung des Nationalkomitees "Freies Deutschland".

Rücker, Fritz ：Die Arbeit der Lehrer im Nationalkomitee "Freies Deutschland" und die schulpolisch－pädagogische Arbeit des Nationalkomitees.

〔この小論は，有岡，宮崎両教授に献げられる。〕 1975年11月16日